

第6部会

斎藤茂吉の老いの諸相

小泉博明

老いはなかなか自覚できない。家族や周りの年下の人たちが本人の老いを早く認識する。人間は他人の目のなかで老い、そしてゆつくりと自らの老いを受容していく。疾病の場合は、治癒の可能性があるが、老いは加齢に従い進行し治癒することはない。しかし、高齢者は、老化現象に対して病名を付けられ、病人であることを期待する。老いとは、老衰、老残、老醜に代表されるように、死への近さが、否定的なイメージを増幅させる。しかし、老成、老熟、老実など老いに対し、肯定的な意味をもつ言葉もある。一人ひとりの長い人生の経験の蓄積の上に構築された、老いの知を発掘し、老いの価値を見出すことが必要である。ここでは、歌人で、精神科医である斎藤茂吉の老いの諸相を凝視し、その底流にある生死観や宗教観を考察するものである。

茂吉が欧州へ留学する前の体調は極めて悪く、インフルエンザ（スペイン風邪）に罹患し生死を彷徨し、恢復後には咯血と血痰が続き、尿検査で蛋白が検出するような状況であった。しかし、長崎医学専門学校教授を辞任し、留学を敢行したのは、一九二一年一月二〇日付、久保田俊彦（島木赤彦）宛の書簡にある「（當分以下他言無用）茂吉は医学上の事が到々出来ずに死んだと言われるのが、男として、それから専門家として残念

でならぬ」という決意に収斂される。そして、三か年に及ぶウィーンとミュンヘンへの留学中には、血痰が出ても「秘めておかむ」とし、刻苦精勵し研鑽を積み、「麻痺性癡呆者の脳図」の論文で学位を取得した。帰国後は、研究者となる「淡き淡き予感」を感じ、自信と期待をのぞかせるのであった。しかし、ミュンヘンのドイツ精神病学研究所留学中に、夜ふけに「陰の白毛を切りて棄てにき」とは、老いのまぎれもない象徴であり、老いを意識した眼差しであった。まさに、老いの徴候であり、あるいは「老いの坂」の起点といえるであろう。四〇代での早熟な老いは、茂吉の病歴から納得せざるをえない。

一九二四年十二月二九日、茂吉は留学の帰途、船上にて青山脳病院焼失の電報を受けた。先に自宅へ送っていた留学中に儉約し購入した書物も、すべて焼失し、研究者への道を放棄し、院長である養父紀一に代わり病院再建へと邁進した。資金難のため金策に奔走し、肺臓を扶るような負担が茂吉にかかり、より一層老いを加速させた。まさに「苦しみは白ひげとなりて」あらわれた。その後、一九二七年四月から、敗戦直前の一九四五年四月に病院が東京都に譲渡されるまで長期間、茂吉は青山脳病院院長として、病院経営と臨床医という重責を全うしたのであった。その間に、十分な養生をしなかった腎臓は慢性腎炎と悪化した。その後、腎臓病より高血圧症、動脈硬化症へと病像を完成させていった。茂吉と言えば、洩瓶の代用である「極楽」を思い浮かべるが、五〇代半ばから使用していた。茂吉の老いと人間性を語るには不可欠なものである。

戦時中は郷里の山形県金瓶に疎開し、敗戦を迎えた。翌年に

は大石田に転居したが、そこで、左湿性肋膜炎という大患になり、肋膜に溜まった二千CC余の水を採取した。晩年茂吉の老いは、門弟の板垣家子夫『斎藤茂吉随行記』、佐藤佐太郎『斎藤茂吉言行』、田中隆尚『茂吉随聞』の日録により肌で感ずる。その後、帰京するが、茂吉は医学者らしく「わが細胞は刻々死するを」と自己の肉体を冷徹に見つめ、老いがあるがままに受容する諦念が凝縮されているようだ。そして、脳軟化症による左半身不全麻痺となり、さらに認知症が茂吉を襲った。茂吉の記憶力は低下し、「手帳の置場所を幾度にも」忘れ、その姿を周囲にも示すが、作歌の創作意欲は衰えなかった。茂吉は、身体を檻樓となるまで酷使するが、作歌することで自己の老いを解放し昇華していった。

フリッチョフ・シュオンと井筒俊彦

中村 廣治郎

シュオンについては前回報告し、井筒については日本ではよく知られているので、その紹介は省略する。両者とも二十世紀をほぼカバーする同世代人であり、問題関心も近く、共通点も多い。しかし、片やスーフィー教団のシャイフ(教主)としての身分をもつ学者としてのシュオンと、片やイスラム神秘哲学を中心とする東洋哲学や言語学・比較哲学の研究者・哲学者としての分に徹した井筒、という生活スタイルの違いからか、そ

こに何らかの関係があったとは思えない。諸宗教はその深奥の根元においては皆一つである、というのがシュオンの基本的思想であるが、そのことを彼は神道や北米インディアン宗教も含めたさまざまな宗教について検証しようとして多くの著作を残した。

シュオンは、この現象的存在の根元にある不可知のものを the Absolute, Beyond-Being などと呼ぶが、それはそのままの形で存在するのではなく、常に一定の順序の下に自己を外化顕現し、現象世界に至る。このことは諸宗教に共通するもので、これを esotericism と呼ぶ。諸宗教の違いはただ絶対者が自己を分節化していくその象徴的形式だけである。この形式的側面をシュオンは exotericism、ないしは upāya と呼び、また人間はこの形式を絶対者の顕現としてではなく、実在そのものと見誤ってしまうことから māya と呼んでいる。

井筒の「東洋哲学」も基本的には同様で、一切の言語的差異化・分節化を超越した絶対不可知の境地、彼のいう「存在のゼロ・ポイント」「絶対的神秘」の段階的な存在顕現の結果として日常的現象世界を捉える。また、シュオンも、不二一元論におけるアトマンとしての人間の主観的側面についても議論しているが、井筒の特徴は、そのようなアリテイの展開を人間意識の認識論的变化に明確に対応させて論じていることである。「存在のゼロ・ポイント」に対応する「意識のゼロ・ポイント」、自我意識・主客の区別が完全に消滅し、すべてが一つになった無・意識はやがて日常的意識へと下降するのである。それを井筒は次のように図式化する…「分節(一)――無分節